

# 「薬物乱用防止」についてオリジナル啓発物品開発

—官学連携による「薬物乱用防止」啓発についてのワークショップの活用—

Development of educational products on "Drug Abuse Prevention"

○笹谷絵里<sup>1)</sup>・改田千恵<sup>2)</sup>

Eri SASATANI, Chie KAIDA

<sup>1)</sup> 花園大学 <sup>2)</sup> 京都市保健福祉局医療衛生推進室医療衛生企画課

<sup>1)</sup> Hanazono University <sup>2)</sup> Medical Hygiene Planning Division, Medical Hygiene Promotion Office, Health and Welfare Bureau, Kyoto City

Key words: 薬物乱用防止, ワークショップ, 医療衛生

## 目的

本稿では、大学生と公的機関（京都市）が共同で実施した「薬物乱用防止」の啓発物品の開発について、大学生と公的機関が連携で啓発を行う事の意義および実際の啓発物品の開発の過程を明らかにし、官学連携の在り方について検討したい。近年、10～20代の若年層の大麻の使用による検挙者数は増加を続けている。原因の一つとしてインターネット等に氾濫している間違った知識や情報が影響していると考えられる。さらに、実際に薬物を使用した例として、SNSを利用して言葉巧みに誘われるケースもあり、若年層への正しい知識の普及は喫緊の課題となっている。そのため、京都市では、薬物乱用防止啓発活動として学校等での講習会やイベント等で使用する啓発物品やチラシを作成している。これらの啓発物品の開発に大学生の意見を取り入れることで、若年層へのより効果的な啓発を図ると考え、花園大学の学生と共同で啓発物品の開発と啓発物品に使用するキャッチコピーの考案を行った。

## 方法

ワークショップは、2022年10月12日（水）9時30分から12時に実施し、場所は花園大学を使用した。テーマは、『薬物乱用防止！オリジナル啓発物品とキャッチフレーズを考えよう』とし、大学生が取り組みやすい名称とした。実施内容は2つである。①薬物乱用防止について、京都市職員（薬剤師）が「大麻の正しい理解」「子どもたちの薬物乱用に対する状況」「薬物の誘いがあったとき、相談をうけたとき」等について講習を実施した。次に、講習を受けて、薬物乱用防止に関する②啓発物品やキャッチフレーズを考えるワークショップを実施した。参加者は、京都市保健福祉局医療衛生推進室医療衛生企画課 職員3名、花園大学社会福祉学部児童福祉学科の学生13名（学生の進路は、養護教諭、保育士、幼稚園教諭、児童養護施設職員、障害児（者）施設職員など）、教員の笹谷の合計17名である。

## 結果

講習では、薬物乱用とはなにか、薬物を社会のルール

からはずれた方法や目的で使うことであることが説明され、市販薬・処方薬も正しい飲み方や使用方法を守らなければ乱用となり得ることが話された。また、1回使っただけでも「乱用」になることもある、ということが説明された。さらに、若者に大麻の乱用が増加している事、ネットの誤った情報や友人・仲間からのロコミを鵜呑みにしている現状が伝えられた。加えて、大麻の加工食品や大麻グッズなどが出回り、大麻が身近なものになっている可能性があるため、より正しい知識が必要であるとの講習を受けた。講習の内容を受け、3～4人の班に分かれ、各班で代表者を選出し、代表者を中心にワークショップを実施した。内容として、1人1人が思いつくままに、効果的な「啓発物品」をポストイットに一個ずつ記入し、模造紙に貼り付けた。その後、各班で模造紙に貼られた意見をグループ分け（グルーピング）した。グルーピングは、各班で文房具、家庭用品、若者向けなど自由項目を設定し行った。グルーピング後、各班で良いと考えられる案を3案ほど選び、選んだ案について、「キャッチフレーズ」と「効果的な配布場所」を考え、模造紙にまとめた。最後に、各班の代表者が発表し情報を共有した。

## 考察

啓発物品のアイデアとして、エコバック、ケーブルバایت、紙石鹸、コースター、あぶらとり紙、お箸、定規、カレンダー、絆創膏、飴など、環境にも配慮した商品が提案された。キャッチフレーズとして、「Look! No Drug」、「不安、迷い、吸い取ります!!」、「気持ちも心もリフレッシュ」、「汚れふき取り、自信のある笑顔へ」、「危険から線引きしよう、心の痛みへらします」などが提案され、2023年3月に『あぶらとり紙』が啓発物品として作成された。参加した学生からも、正しい知識を持つことや人格を否定することのないキャッチフレーズを提案することの大切が話された。ワークショップから、大学生が自分の身近な問題として啓発商品を開発することができたと考える。